

研究ノート

大宰府における草花双鳥鏡出土墓の再評価

高 橋 学

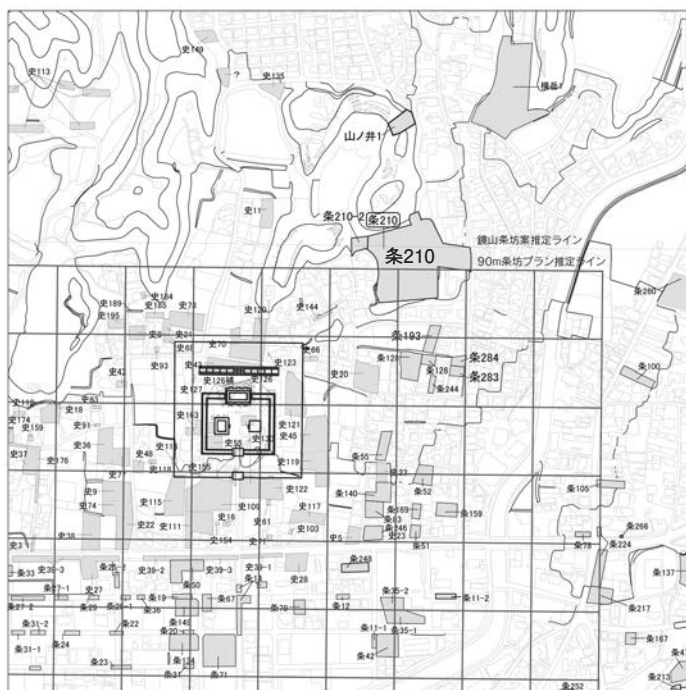
はじめに

大宰府条坊跡第210次調査（以下、条210と略す）⁽¹⁾は、太宰府市教育委員会文化財課により平成12年度（2000）に埋蔵文化財の発掘調査が行われた（第1図、第2図）。その後、遺構・遺物等の整理を行い、周辺の調査成果と併せて平成25年（2013）に報告書を刊行している⁽²⁾。調査成果の詳細は報告書を参照して頂きたい。

今回、条210から出土した草花双鳥鏡について再度、検討を加える契機となったのは、全国的な中世和鏡の研究⁽³⁾から条210出土和鏡が漏れ落ちていることに気付いたのが主な要因であり、本稿において改めて資料的価値の提示と共に報告書刊行当時に不十分だった遺構の位置づけについても再評価を行うものである。

1. 出土遺構について（第3図、第4図）

条210の北東部に東西長4m、南北長4m、高さ0.65mを計る丘陵の高まりが検出された。この高まりの南端部に掘りこまれる形で墓が検出された。これを条210ST010と呼称している。東側には条210SD005とした幅1.5m、長さ5.3m、深さ1.1mを測る南北溝がある。つまり、この墓は丘陵端部を整形してマウンド状にし、周囲には溝を巡らせるものだったと考えている。残念ながら、丘陵の北側は工場建設にともない削平されていた。西側は試掘トレンチにより掘削されており、全体の姿は不明である。標高は67m前後。検出された墓壙は、東西長1.7m、南北長1.85m、深さ0.67mを計る。削平により本来の姿はとどめていないが、平面プランは残存部からの推定で方形もしくは正方形に



第1図 条210次調査位置図（S=1/10,000）



第2図 条210次調査空中写真（北から）



第3図 条210次調査遺構配置図 (S=1/500)

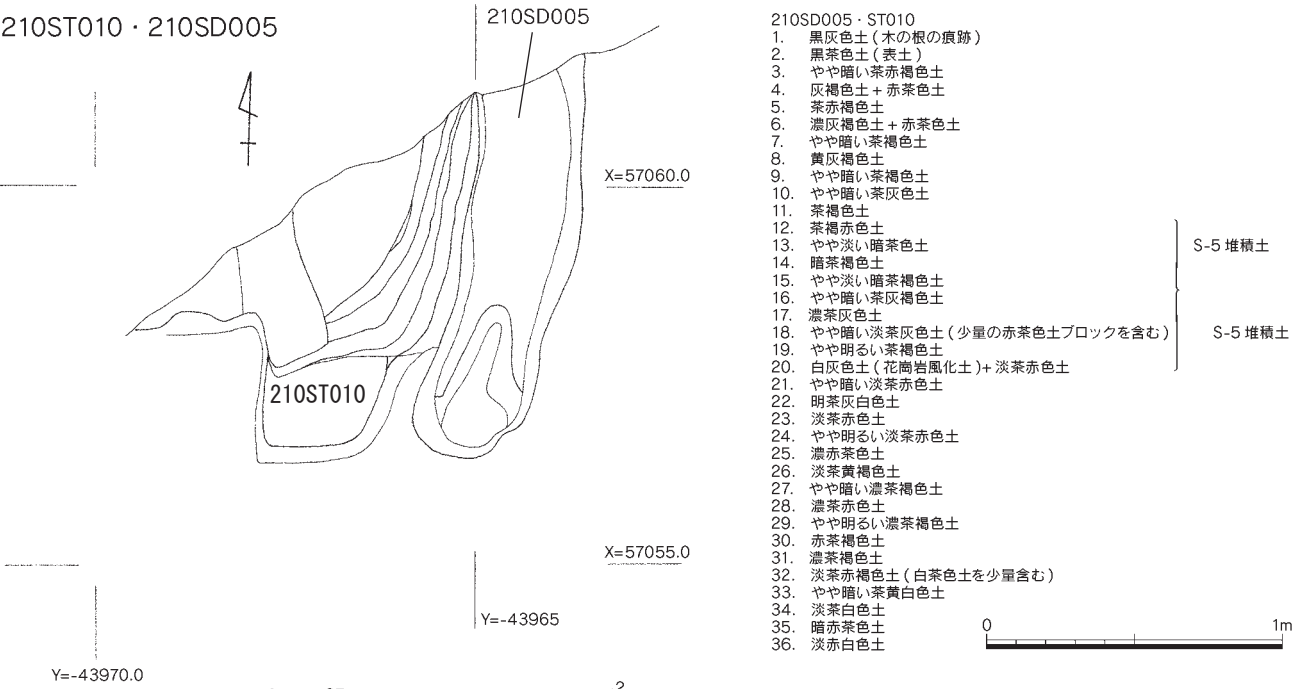
近いものだったと推測している。

出土状況は、墓壇内の北西部に白磁の皿が置かれ、北部端中央にはまとまって草花双鳥鏡、刀子、和鋏、青白磁の合子、鉄釘が検出されている。注目すべきは、鏡の紐側を下にして据えていることで、鏡面に織った布と思われる付着物があることから本来、鏡は布に包まれていたことが想定できる点である。また墓壇内の鉄釘はこの鏡周辺にしか検出されていないことから副葬品を納める釘をつかった化粧箱のような小さな箱状のものがあった可能性がある。土層の観察では遺体を納める木棺等の形跡は確認できていない。報告書では出土遺物、とくに白磁皿の年代観から12世紀代の遺構と考えられている。遺構と遺物の再検討から、もう少し絞り込むと12世紀前半と推定できる⁽⁴⁾。

2. 出土和鏡について（第5図、第6図）

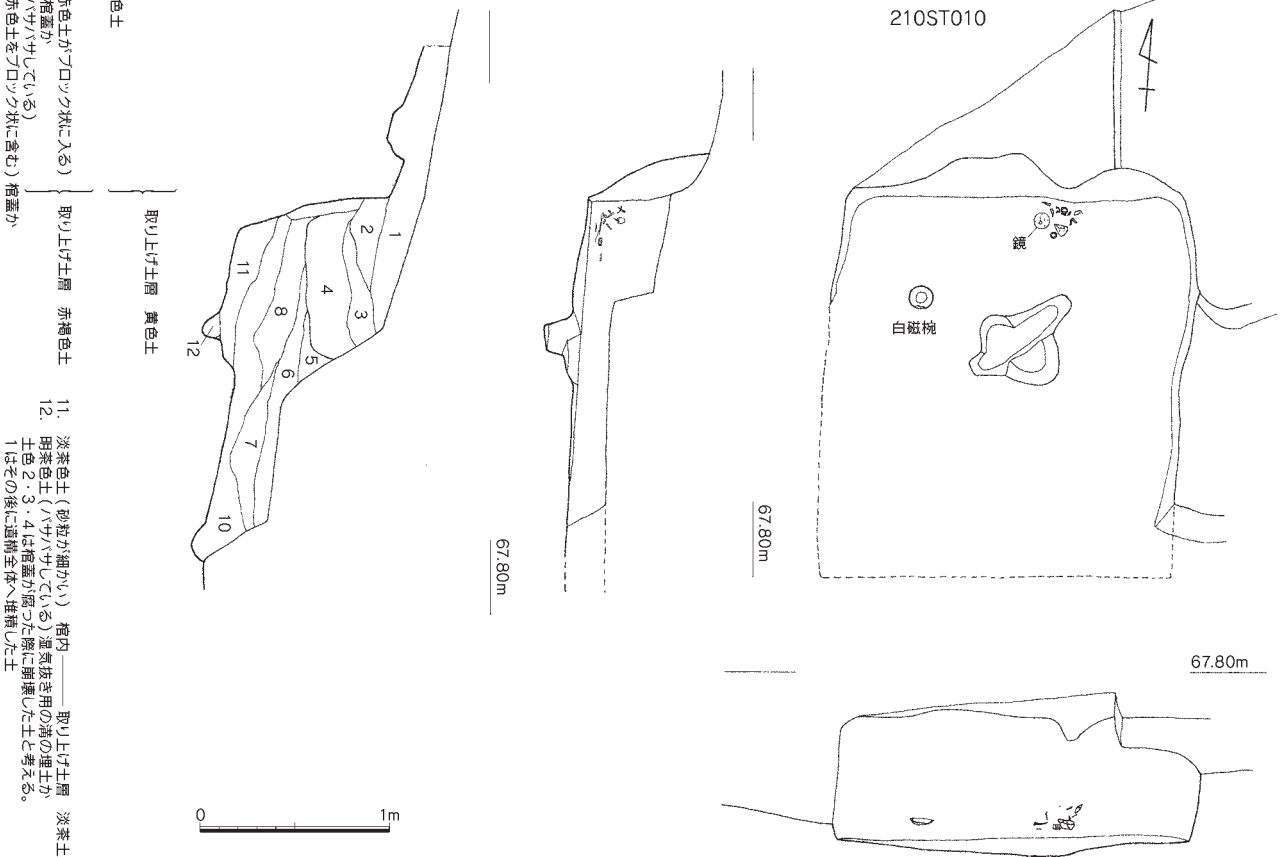
条210ST010の淡茶色層から出土した草花双鳥鏡は、縦8.3cm、横8.3cm、厚さ0.45cmを測る円鏡である。鏡背を観察すると、紐は紐座を持たない素紐で界圈を巡らさず、周縁の断面はややつぶれた三角形を呈す。紐を中心にして鳥文を対角に配置しており、鳥文の対角には草花文を配置するため草花双鳥鏡⁽⁵⁾と分類されている。東京国立博物館所蔵和鏡群の紀年銘資料を分析し、型式変遷案を提示した内川氏の成果（内川2019）を参考にすると、条210ST010出土の草花双鳥鏡は、福岡県直方市永満寺字間の永満寺経塚に使われた草花双鳥鏡と、縁式が三角縁、紐式は素紐、圈式は無圈

210ST010・210SD005



210ST010

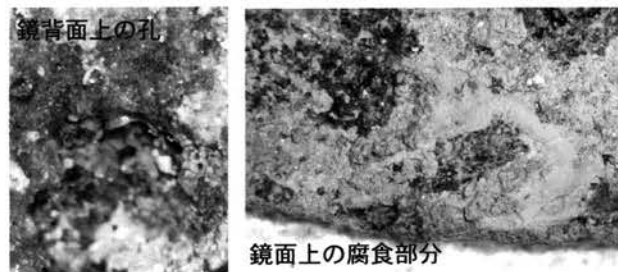
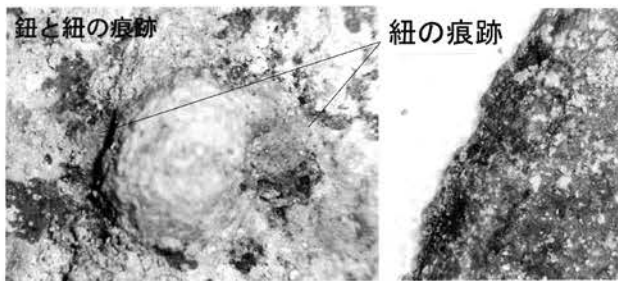
1. 黄褐色土
2. 明黄褐色土
3. 赤褐色土
4. やや明るい黄褐色土
5. 暗黄褐色土
6. 暗赤褐色土
7. 暗赤褐色土(赤色土がブロック状に入る)
8. 暗赤褐色土(箱蓋か)
9. 暗赤褐色土(バサ/バサしている)
10. 暗赤褐色土(赤色土をブロック状に含む) 箱蓋か



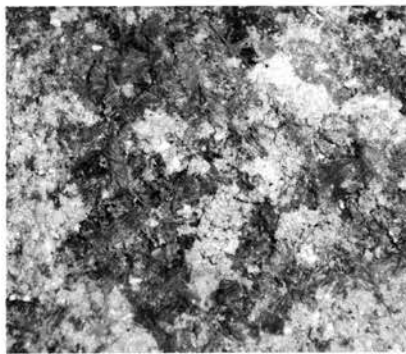
第4図 条210次調査SD005・ST010遺構図 (S=1/50、1/40)

条210次

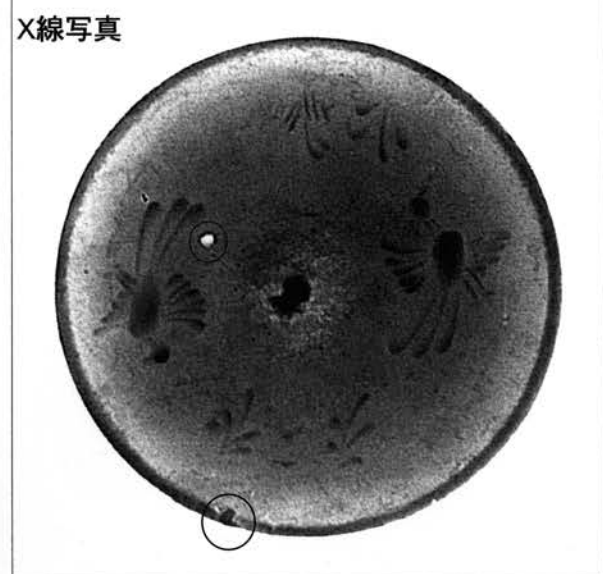
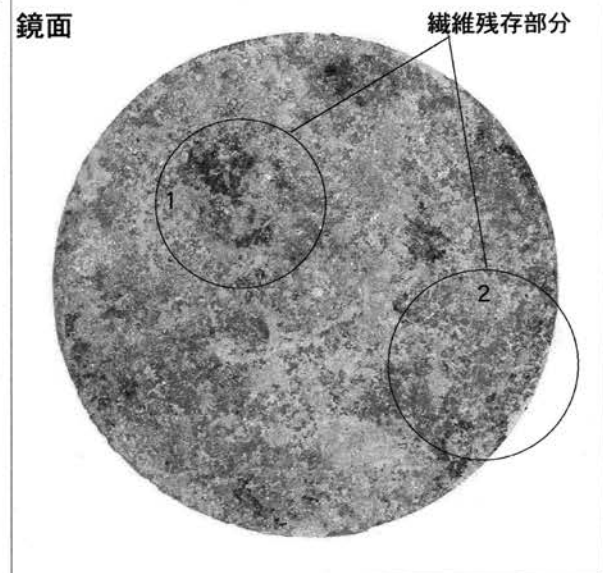
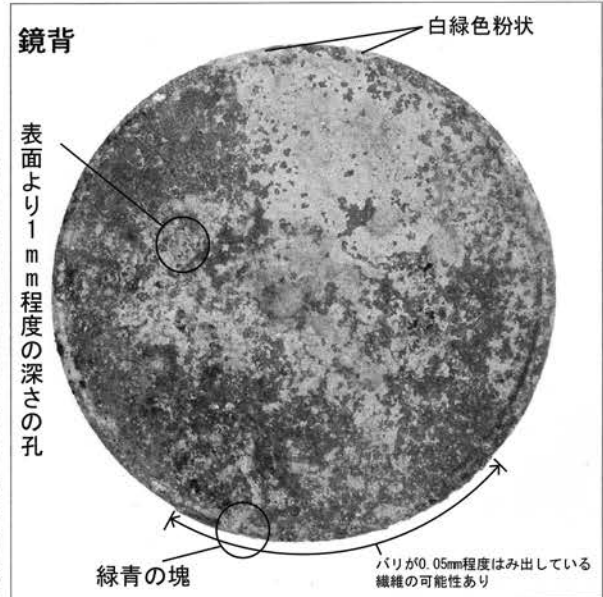
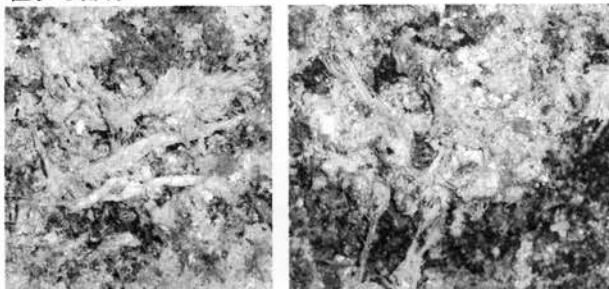
S-10 淡茶土 20000801（処理前）



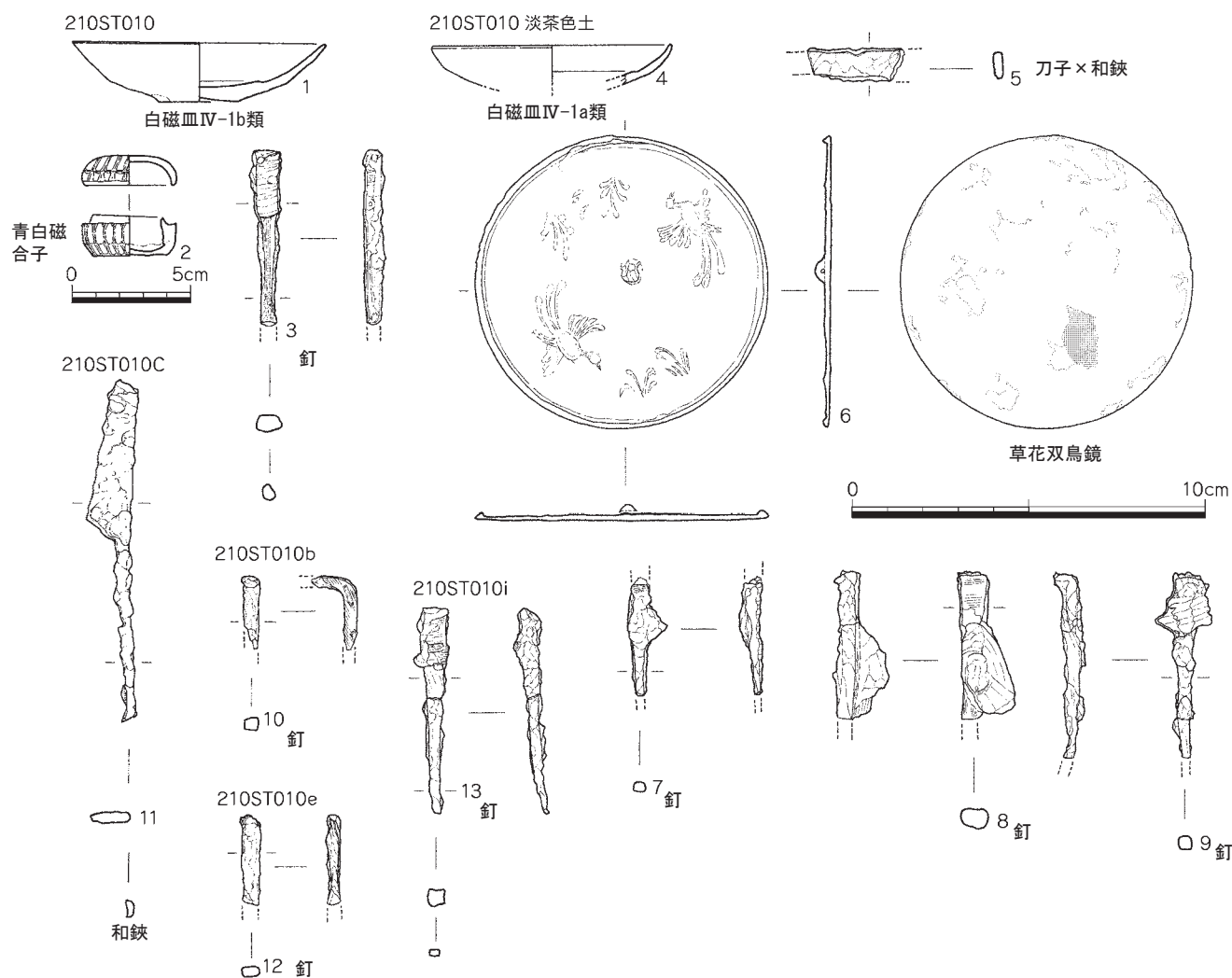
1
繊維が最も良く
残る部分



2
繊維の残欠が散
在する部分



第5図 条210次調査ST010出土草花双鳥鏡画像



第6図 条210次調査ST010出土遺物実測図 (S=1/2、1/3)

の特徴から様式の共通が確認できる。この永満寺経塚鏡は、天永元年（1110年）、永久元年（1113）のいずれかの経筒に伴うものとされており、12世紀第1四半期に製作されたものといえる。内川氏により和鏡様式のはじまり（タイプ1）と設定されている。条210ST010出土の草花双鳥鏡も同タイプであり、12世紀第1四半期のものと考えて問題はないだろう。なお、同時期の型式として、細線単圈・外傾式細縁（タイプ2）、細線単圈・外傾式中縁（タイプ3）が設定されている（内川2020）。

3. 条210ST010出土草花双鳥鏡の評価及び被葬者について

他の出土遺物から推定される遺構年代は12世紀前半であり、草花双鳥鏡の年代観は12世紀第1四半期とされているため、12世紀第1四半期までに製作されていた鏡を使用していた被葬者が亡くなった後、葬る際に愛用したものとして墓内部に副葬したものと考え、墓の構築年代とも矛盾しない。

墓の被葬者については副葬品に鏡、和鋏、青白磁合子、白磁皿、刀子などが化粧道具と推定されるため、女性の可能性が高いと考えられる。和鏡を副葬する墓は大宰府でも珍しく、被葬者の社会的な地位が高いことを示唆しており、被葬者がどのような人物だったか、引き続き検討が必要だろう。

4. 奈良・平安期の太宰府土葬墓群との比較について

前述のように条210ST010は、小高い丘陵の南端部に位置し眼下には大宰府条坊が広がるという風光明媚な場所に作られている（第2図参照）。墓の立地や年代から大宰府での当該期墓地群内での条210ST010の位置づけを行っておきたい。大宰府の墓制研究については、狭川真一氏、中間研志氏、中島恒次郎氏等の先行研究がある。近年では井上信正氏が都城大宰府と墓域を取り上げて狭川氏以来の研究テーマである都市と墓の変遷画期の再整理を行いながら、特に墓が立地している標高に注目し、研究の総括を行っている（井上2018）。中島恒次郎氏の研究によれば、大宰府での古代前期末～後期の土葬墓の立地については明確な特徴が見てとれる。それは、基本的に墓は条坊外に作られており、条坊内に作られる場合は丘陵地及びその裾部に作られることである（中島2007）。遺跡事例は以下のとおり。

在地の有力者および大宰府の官人墓地と推定されている大宰府の西部に位置する買地券が出土した宮ノ本遺跡で造営年代は8～9世紀代。前田遺跡は宮ノ本遺跡が所在する丘陵部の東裾の展開する墓地であり、造営年代は9世紀から10世紀初頭。日焼遺跡は宮ノ本遺跡の北東丘陵に広がる墓地で、造営年代は9世紀から10世紀中葉。妙見遺跡は太宰府市の北西部に位置し、四王寺山裾の丘陵地に広がっている。造営年代は9世紀から10世紀。君畑遺跡は大宰府条坊跡の東に位置し、丘陵上に展開する墓地である。造営年代は9世紀後葉から12世紀前葉。剣塚唐人塚遺跡は大宰府条坊跡南西部に位置し古墳およびその周辺で墓地が形成されている。造営年代は8世紀中葉から9世紀代である。筑紫野市の堀池遺跡は大宰府条坊跡の南側で、500mほど郭外にあたるが、9世紀中頃から後半まで墓が造営されている。以上のように大まかに言うと大宰府条坊の郭外を中心に8～10世紀には盛んに墓地が形成されるが、11～12世紀になると大規模な墓地形成は行われなくなることがわかる⁽⁶⁾。また狭川氏（1990）、井上氏（2018）で指摘されているように大宰府土器編年Ⅺ期～Ⅻ期頃（11世紀中～後半）に、それ以前には基本的に条坊外（条坊内であっても丘陵地）にあった墓が、条坊内の平地へ侵入してくる事例が2例確認できる⁽⁷⁾。しかしながら、それ以外の12世紀代の墓事例（条坊内及び周辺）は、12世紀中～後半に集中しているため、上記の2例は特殊な事例か、もしくは先駆的な現象と現時点では評価しておきたい。つまり、条坊内への墓の安定的な構築が行われたのは平安時代末～鎌倉時代初期という時代の変換期に起こった現象と解釈しておく。

上記事例を参考にすると、条210ST010は古代末の大宰府での墓地形成の流れをくむもので、四王寺山の南側山裾で見つかった初めての平安時代後期（12世紀前半）の土葬墓といえる。また同時代の墓は、君畑遺跡があるが、他に類例が少なく稀少である。また、その副葬品から葬られた人物は地位が高い女性の可能性が高く、歴史的事象として興味深い事例といえる。

以上、条210ST010について、遺構と出土和鏡などの遺物からみた再評価をおこなった。今後の課題は、他地域での和鏡副葬墓との比較検討などを行うことで被葬者階層の解明などがあげられる。

※図面、画像はすべて太宰府市教育委員会文化財課編2013『大宰府条坊跡43—大宰府条坊跡第193・210・210-2・283・284次調査、山ノ井遺跡第1次調査—』太宰府市の文化財第116集 太宰府市教育委員会からの引用であるが一部改変した。

【註】

- (1) 太宰府市内で埋蔵文化財発掘調査を行う場合は、基本的に対象地の字名を遺跡名とする。しかし、古代官司「大宰府」にともなう都市の範囲は字を越えて広域に展開するため、便宜上、大宰府条坊跡と称している。今回対象とする大宰府条坊跡第210次調査は、その条坊内でも北側に位置し、四王寺山の南裾に舌状に張り出す丘陵部の突端にある朝日山とよばれる低丘陵に位置する。
- (2) 太宰府市教育委員会文化財課編2013『大宰府条坊跡43—大宰府条坊跡第193・210・210-2・283・284次調査、山ノ井遺跡第1次調査—』太宰府市の文化財第116集 太宰府市教育委員会。
- (3) 引用参考文献にあげた國學院大學博物館・國學院大學学術資料センターによる報告書三部は、中世和鏡についての包括的な研究成果であり、本稿もこれによるところが大きい。
- (4) 条210ST010からは在地の土師器が出土していないため、白磁皿の年代観を採用した。白磁皿VI-1a、b類は共にC期（Ⅻ～ⅩⅢ期、11世紀後半～12世紀前半）の標識磁器。青白磁の合子も同時期。条210ST010に伴うと考えている条210SD005からはD期（ⅩⅣ期、12世紀中頃）の準標識磁器白磁皿Ⅲ-1と在地の瓦器椀（中島編年Ⅱ-2～3）が出土している。これらの遺物群の年代から判断して、溝の埋没時期は12世紀中頃～13世紀代と幅があるが、埋没までの時期差を考慮すると、墓へ遺物が納められたのは12世紀前半と考えて良いのではないかと。
- (5) 報告書では草文双鳥鏡としたが、草花双鳥鏡と修正する。
- (6) 12世紀後半、つまり平安時代末～鎌倉時代初頭にかけて大宰府では再び墓地の形成が始まるが、それは古代的な墓地の立地だけでなく、条坊内にも積極的に墓が構築されるようになり、墓地の選地の思想的変化、社会的環境の変化が見てとれる。
- (7) 条93ST210出土遺物は白磁皿X'類が1点のみで完形ではないが、墓に伴う供献土器と調査担当者は判断している。白磁皿X'類は陶磁器区分B期（10世紀後半～11世紀中頃）の標識磁器である。同遺跡での留意点として他の墓遺構（条93ST040、条93ST060）が龍泉窯系青磁椀Ⅰ類を伴うD期（ⅩⅣ～ⅩⅤ期、12世紀中頃～後半）の遺構であることと、条93ST210の遺構が削平を受けており、遺構・遺物的に安定的とはいえないことにある。また大宰府史跡第88次調査SX2600は木棺墓で遺構の残りは良い。遺物は土師器（小皿a、丸坏a）、鉄刀子、鉄曲鎌、鉛玉が出土している。小皿aの口径9.8cm、器高1.3cm、底径7.8cm、丸坏aは口径15.0cm、器高4.2cm、底部ヘラ切り。これらはⅪ期～Ⅺ期A（11世紀中～後半）か。

【引用・参考文献】

- 井上信正2018「大宰府の葬地と都市」『東アジアの古代都城と葬地・墓葬』資料集、東アジア比較都城史研究会
内川隆志編2018『中世和鏡の基礎的研究 出土鏡編』國學院大學博物館・國學院大學学術資料センター
内川隆志編2019『中世和鏡の基礎的研究 分析編』國學院大學博物館・國學院大學学術資料センター
内川隆志編2020『中世和鏡の基礎的研究 分析編2』國學院大學博物館・國學院大學学術資料センター
九州歴史資料館編1985『大宰府史跡 昭和59年度発掘調査概報』九州歴史資料館
狭川真一1990「古代都市・大宰府の検討—墳墓からのアプローチ—」『古文化談叢』第23集別冊 九州古文化研究会
のち狭川真一2011『中世墓の考古学』（高志書院）に「古代墳墓の展開—大宰府の様相から—」と改題再録
太宰府市教育委員会文化財課編1998『太宰府市の文化財第37集 大宰府条坊跡Ⅹ—推定大宰府朱雀大路周辺の調査—』太宰府市教育委員会
太宰府市教育委員会文化財課編2000『太宰府市の文化財第49集 大宰府条坊跡ⅩⅤ—陶磁器分類編—』太宰府市教育委員会
中世墓資料集成研究会編2004『中世墓資料集成—九州・沖縄編（1）—』中世墓資料集成研究会
中島恒次郎1992「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会
中島恒次郎2007「「都市」的な墓、「村落」的な墓（上）」『古文化談叢』第56集 九州古文化研究会
中間研志1983「大宰府の奥津城」『大宰府古文化論叢下巻』吉川弘文館
日本中世土器研究会編2022『新版 概説中世の土器・陶磁器』真陽社
山本信夫1988「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器—10～12世紀の資料（1）本文編—」『中近世土器の基礎的研究Ⅳ』日本中世土器研究会

（たかはし・まなぶ 太宰府市教育委員会文化財課主任主査）